

第19回 東京芸術文化評議会 議事要旨

- 1 日 時 平成26年6月30日（月曜日）10時00分から12時00分まで
- 2 場 所 東京都庁第一本庁舎7階 大会議室
- 3 出席者 舛添都知事
福原会長、秋元評議員、浅葉評議員、太下評議員、大野評議員、
小山評議員、仲道評議員、野田評議員、野村評議員、花柳評議員、
日比野評議員、森評議員、吉本評議員
- 4 議 事 オリピックの文化プログラム及び今後の東京の文化政策について
- 5 発言内容

○福原会長 今日、お忙しいところ御出席ありがとうございます。今日はほとんど欠席のない状況で、欠席の杉本評議員と宮田評議員は海外にいらっしゃるんです。こんなに大勢集まっていたことは初めてだと思います。ありがたいことです。

では、第19回の東京芸術文化評議会を開催いたします。始める前に舛添知事から御挨拶をお願いします。

○舛添知事 皆さん、おはようございます。今日は朝早くからお集まりいただきましてありがとうございます。かつて一緒に仕事をした仲間もたくさんおられますし、新しい方もお見えいただきましてありがとうございます。

2020年東京オリンピック・パラリンピックをぜひ成功させたいということで、会場計画の見直しを含めていろいろな点で、今、大車輪で動いているところでございますけれども、スポーツと障害者スポーツだけではなく、この五輪・パラリンピックは文化の戦いというか、文化でも世界一を目指す、この大きな目標があると思います。ロンドン大会では、文化の面でも画期的なことをやった。それが成功の秘訣であると思っております。

東京芸術文化評議会の皆様方には、色々な面で東京都の文化政策についてこれまでも貴重な御提言をいただいております。ロンドン大会では、アーツカウンシルが非常に重要な役割を果たしたということで、皆様方の提言により、アーツカウンシル東京も設置いたしました。私も、音楽や絵画も含めて芸術が非常に好きですから、しょっちゅう都内のそういう場所に行っています。福原会長が館長を務めておられる東京都写真美術館や森評議員が理事長を務めておられる森美術館もこの前視察しましたが、今、各地を視察しています。上野は文化の集積地点であり、国立西洋美術館、東京藝術大学の美術館、東京国立博物館がある。少し南に行くと江戸東京博物館や東京都現代美術館もあります。県を越えて、千葉の市立美術館には、鈴木春信を始めとする素晴らしい浮世絵のコレクションがあります。横浜みなとみらい21にある横浜美術館も素晴らしい。埼玉県立近代美術館も非常に渋い美術館です。東京大会の時は近接県の美術館とネットワークを結んで、オリンピック期間中は1枚のチケットで全部見られるような試みをやりたいと思っております。絵画を中心

にお話ししましたがけれども、これは音楽や舞台についても同じことが言えます。モネ、ゴッホ、ルノワール等の作品には浮世絵の影響が出ている。2020年の前後に、東京に来れば浮世絵も印象派も同時に見られますよと。素晴らしい印象派の作品が日本にたくさんあります。

アール・ブリュットはデュビュッフェが始めたわけですが、クリエイティブな形のアール・ブリュットをパラリンピックに合わせてやるのも非常にいいと思っております。

雷門の前に立たれると目の前に雷門があって、右手にスカイツリーが立っている、この超現代と伝統が融和しているところが東京の素晴らしいところです。そういう意味で、世界中の人が何だこれかと思うような、度胆を抜くような皆さんのアイデアをいただきたい。

皆さん方の忌憚のない意見を賜って、本当に自由に何をおっしゃっても、何を提案されても構いません。後藤新平ではないですが、文化の面でも大風呂敷を広げてやりたいと思いますので、よろしく願いいたします。ありがとうございます。

○福原会長 ありがとうございます。

これから本題に入りますが、本日の議事はお手元に配付した次第のとおりになります。オリンピック文化プログラム及び東京の今後の文化政策に関して検討をいただきます。本件については、今年度より文化プログラム検討部会を新たに設置して、6月5日に開催された第1回の部会にて活発な議論がなされました。その内容につきまして、部会長の吉本評議員から説明をいただきたいと思っております。

○吉本評議員 それでは、お手元の資料2に沿って手短かに御報告をしたいと思います。

第1回文化プログラム検討部会では、18名の専門委員のうち15名の方に御出席いただき、大変活発な議論、ユニークなアイデアが提案されました。この資料に基づいて、上から順次専門委員の方々の御意見を御紹介したいと思います。

日比野委員は、今、六本木アートナイトで「動け、カラダ！」というアスリートのアート作品や、東京都美術館と東京藝術大学が連携したプロジェクトもやられています。六本木や上野には9つの文化施設があるので、六本木や上野などの文化拠点を生かす取り組みをやってはどうかという御提案がありました。あわせて、ロンドンと同じような障害者アート、アール・ブリュットを広域で展開する。その場合、生まれつき持っているものをリスペクトするという日本的な考え方で行うという御提案です。

大友委員からは、福島原発事故で被災をしている公園に大風呂敷を敷いて、その上でフェスティバルを行ったご経験から、盆踊りを展開してはどうかという提案です。盆踊りは皆がわっと一緒にできるものであり、海外の人から見るとレゲエのような衝撃のあるビートだそうです。そして、もう少しマイナーなものになるが、ノイズ・ジャパンのような音楽イベントをやってはどうかという御提案もありました。

岡部委員からは、64年から2020年ではなくて、60年先にあたる2024年ぐらいまでのスパンで考える。次世代を育てるということも含め、過去のオリンピック開催都市のアーティストとコラボレーションを行うことで、多層的な日本の豊かさを発信する。

あわせて、東京や日本の古典、日本の小説家にインスピレーションを受けて海外で制作された作品や映画など、まだ紹介されていないものが随分あるので、そういったものを紹介してはどうかという御提案でした。

野村委員からは、日本人のアイデンティティーを考えるような催しにすべき。古典は、日本の場合は雅楽、能楽、歌舞伎など、それぞれの時代に確立したものがそのまま残っているが、世界的に見ても非常に特殊なことである。それを踏まえて、日本舞踊とオーケストラのコラボレーションなど、日本古来の伝統芸能の良さをわかりやすく発信する形でやってはどうかという御提案でした。

白石委員からは、東京アートゾーンとして、上野、六本木、池袋、新宿・渋谷、墨田などのエリアごとに個性を明確化して、既存の文化施設や文化プロジェクトなどをつなぎながら、ネットワークを構築することで五輪のお客様を迎えるという御提案がありました。

草加委員からは、文化プログラムは、オリンピックやスポーツという命題があった上でのプログラムであり、スポーツは競う・極めるということに対して、文化はつなぐ・広げるという要素がある。聖火リレーや盆踊りをリレーして全国を回る、人と人が出会う、つながる、そうした地域と地域を結ぶ取り組みをしてはどうか。その実施体制については、東京都歴史文化財団、アーツカウンシル東京、文化庁、観光庁など、既存の組織をうまく生かして組み上げていくという御提案でした。

津村委員からは、今の日本の文化の状況は東京一人勝ちの状態であるため、地域と東京の共同制作や全国の劇場や音楽ホール、美術館が双方向に連携する取り組みが必要。コミュニティダンスはイギリス発祥で日本各地で定着しつつあるが、盆踊りに形を変えつつある。それを題材に、全国各地が持つ記憶や資源をアーティストが現代的にアレンジして、新しい価値観をつくってはどうかという御提案でした。

小野木委員の御提案は、今、世界を席卷しているファッションやアニメなどの水脈をたどれば必ず日本の文化、伝統文化にたどり着く。「伝統WA感動」、「神楽坂まち舞台・大江戸めぐり」など東京文化発信プロジェクトが実施しているが、学校教育などを含め、様々な場で伝統芸能の出演機会を拡大してはどうかというものでした。

市山委員からは、カンヌ映画祭への日本人監督の参加など、タレント・キャンパス・トーキョーは人材育成事業としてかなり成果が出てきている。海外映画人と共同制作を行うことで、海外と渡り合える映画作家、プロデューサー、カメラマン、俳優などの人材を育成する。また、過去の日本映画には、現存しない風景が残る貴重な文化資源になるものが多いので、ぜひデジタル化して保存してはどうかという御提案でした。

菅野委員からは、「ヤング・クリエイターズ・フォーラム」という国際的な文化プラットフォームを東京につくり、世界中から様々なクリエイターを集め、国際的な人材育成のシステムを構築するというアイデアが示されました。その中でアカデミーやラボラトリー、あるいはプレイベントやフェスティバル、レジデンシープログラムを活用するという御提案です。

太下委員からは、津軽三味線のような日本の伝統とカッティング・エッジ（最先端）なものとはつながっているのので、世界的なイベントで伝統音楽の国際発信をしてはどうか。1964年東京五輪では、デザイナーという職業が確立されたので、文化に携わる職業の確立、文化支援を持続可能とするための新たな財源としてカジノやIRなどが話題になっているので、その活用を図る。世界のアート関係者を日本に滞在させて日本の良さを知ってもらい、日本のファンを育成することもこの機会に取り組むべきだという御提案でした。

深澤委員からは、スポーツと文化の祭典を同時に楽しめるスマホ用アプリを今すぐにも開発したらどうか。日本や東京では、あらゆるものが統制され、非常によく整えられていることが特徴になっているので、そのことを日本文化として発信する。あわせて、動線を重視して、空港、駅、ホテルにアート、芸術を埋め込んでどうか。また、ポップカルチャーの竹下通りと荘厳な明治神宮、東京駅丸の内と皇居など、海外の方がおもしろいと思う伝統と現代が同時に存在しているエリアをデザイン、アートでつないでどうかという御提案がありました。

高萩委員からは、ロンドン大会では、最初は盛り上がりすぎてアーティストが色々なアイデアを出したが、一時期意識が冷えてしまった。東京五輪に自分たちは関係ないとアーティストが思う状況をつくらないためにも、様々なアイデアを上手に吸い上げ、整理し、実行する、行政とアーティストの間に立つ組織が必要ではないかという御意見でした。

三好委員からは、人口減少、高齢社会、社会基盤の老朽化が今の日本の3つの課題の解決に文化プログラムが貢献できる。国際性を身につけた若者の育成、障害者だけでなく高齢者も文化プログラムの中心に据えるプログラムを実施してはどうか。あわせて、アーティストはもとより様々な人々が文化の意義に気づく機会であってほしいという御意見でした。簡単ですが、報告は以上です。

○**福原会長** 知事や専門部会の皆様の御提案は大変意味のあるものだと思っております。知事が言われるように、オリンピックはスポーツの祭典ですが、オリンピック憲章ではスポーツと文化は一体のものと位置づけられております。ロンドンにはたくさんの外国人がいますが、それぞれのコミュニティであまり交流がないので、オリンピックの祭典を通じて世界の人々が交流し、それが本国に波及して全世界の平和が保たれるという壮大な目的もあったと聞いております。東京五輪がロンドンに勝るとも劣らない、文化の面でも実りあるものにしなければいけないと思っております。

そのためには、まず海外のアーティストを東京に集結させて世界レベルの芸術文化を展開してもらおうということ、もう1つは東京を中心に日本全国から世界へ向けて、どのような考えで日本の豊かな文化や芸術を発信していくかがとても重要な課題だと考えています。

ロンドンでは、文化プログラムを4年前から始めたようですが、そう考えると、私たち委員に残された時間はそうないのです。評議員の皆様とこれから先、さまざまな課題について一緒に考える機会をいただければと思っています。

オリンピック文化プログラムや東京の今後の文化政策は、オリンピックに来る外国の観

光客にもとても重要なことです。それについての御提言等、御発言をお願いいたします。お一人の御発言は3～4分で、足りなければ後ほど追加していただきます。御発言は、秋元評議員、日比野評議員、森評議員という順番でよろしくをお願いいたします。

それでは秋元評議員、お願いいたします。

○秋元評議員 文化プログラムを考えていくに当たり、一番に、東京都、日本国が考えていかなければいけないのは、一部の人間だけがその文化を考える、オリンピック・パラリンピックに寄与しているという構図ではないということ。東京都の人口は、今、約1,335万人、日本の人口は約1億2,710万人ですが、これこそが最大のコンテンツではないか。文化が一方的に発信されるのではなく、この人たち全てが教え教えられる。東京都や日本国に住んでいる方がみんな、文化を発信する一人になれる環境をどうしたらつくれるかがポイントだと思います。そのために文化の平均点を上げる、みんなのオリンピック・パラリンピックとする。私にできることは何か、人は何かのエキスパートだというのがコンセプトにならないかなと思っています。

ここに住んでいる方、生きている方はみんな、語学、歴史、建築、美術、文学、音楽、料理、スポーツなど、何か必ず自分が生きてきた証のようなものがあり、その専門家だと思えます。この方々にある種のボランティアのガイドとして参加していただいて、1つの文化プログラムがつかれないか。オリンピック大学のような、期間限定でも何かできないだろうか。誰もがこのボランティアになれるわけではなく、認可された人、認められた人たちだけがバッジなり身分証を持てるものです。何とか私もこの分野でこのボランティアのガイドをやりたい、あるいは教える側になりたいと希望した時に、教えるなんて偉そうなものでなくても、例えば、『この建物は……』、『このお祭りは……』、『この料理は……』と解説できる人がいれば、もっと東京、日本を知っていただけるわけですし、受け入れる都民、国民の意識も高くなると思います。学生時代の文化祭のように実行委員だけが盛り上がるのではなく、みんなが参加できるオリンピック・パラリンピックにしなければいけないと。

ロンドンのように、ある期間集約してブースができて、東京に来たらやっておきたい100の文化、100のことを見せるのも必要だと思います。つまり、僕のイメージは、オリンピック、パラリンピック開催の時に、街を歩いているとバッジをつけた人にいろいろ聞けて、こういうことを教えてくださいと言うと、喜んでそれぞれが教えられる環境をつくれないうるか。演劇、バレエ、相撲、歌舞伎、能、狂言、アニメなど何でもいいと思えます。それぞれが教えて教えられて、外国からいらした方、我々も都民、日本国民でありながら知らないことがいっぱいあるので、知らないことを教えてもらえる環境こそが本当の文化ではないかと思えます。みんなが参加できるボランティアのような、ボランティアでありながらみんなが教え教えられる環境をつくっていくことがまず第一歩で、これが残された時間でまずつくるべきではないかというのが僕の意見です。ありがとうございました。

○福原会長 日比野評議員、どうぞ。

○日比野評議員 日比野です。よろしくお願ひいたします。秋元さんの意見、大賛成で本当にそう思います。芸術文化がプログラムで、演劇、展覧会、映像含めてコンテンツだけではなくて、それを支える周りの市民、国民、都民の人たちがどれだけ盛り上がるか、盛り上げる力が芸術文化にはあると思います。芸術文化の一番の特性は個性であり、その個性を尊重し合うことが美術、芸術のいいところです。今僕らが知っている美術、芸術の力は氷山の一角であって、もっと社会を変える、新しい社会をつくる大きな力が芸術文化にはあると信じております。

文化プログラムを考える会ということですが、文化プログラムを実施することで、支え合う社会「おたがいさま社会」というタイトルをつけましたけれども、それぞれの個性を尊重し合えるような社会をつくるきっかけにしていく。単に、よい展覧会、よい催事をするだけではなくて、それを行う担い手を育成することで新しい社会をつくっていこうという提案をします。

おたがいさま社会をどこでやっていくのか。個性が活かされるのが芸術ということで、まず都内で特性のある場所を文化特区として活用する。上野、六本木、池袋、渋谷エリアの公共文化施設の特性を生かして、そこを拠点としてやっていく。

それぞれの地域にはしっかり統括できるマネジャーを置き、そして地域との繋げ役のコーディネーター、表現者や住民をサポートするスタッフが連携をしながらその地域の特性を生かした活動をしていく。その全体がカルチャーオリンピッククラブ「おたがいさま」という意識のもとで動いていく。既にある文化施設の中で行われることもたくさんあると思います。それらを含めてその価値観を表舞台だけの評価だけではなく、裏方を含む制作過程の成り立ちを目的に含め、評価対象とすることによって、ただ単なる文化プログラムをやるのではなくて、その後その文化が残すものを築いていく、また未来に向けて新たな文化を築く底力が養えていくのではないかと考えます。

カルチャーオリンピック「おたがいさま」は、これから日本の少子高齢化などによる、オリンピック以降顕在化してくる社会問題を解決するための礎をつくっていきたいと思っております。文化プログラムの実施を通して新たな社会の姿をつくりあげていこうということです。

この文化プログラムの担い手は、地域の特性をよく知っている人材、地域と人を結ぶ人材の育成が必要となります。いわゆるコーディネーター、キュレーター、マネジャー、サポーターということです。これらは東京都美術館と東京藝術大学が連携して行っているアートコミュニケーター事業「とびらプロジェクト」の手法をベースに、各地域でさらに大きく展開しながら、人材育成をしていければと考えています。

次に今後どのような時間軸で展開していくかですが、2020年だけではなくすぐにでも始める。一朝一夕でできるものではありませんし、既にあるものもありますので、それを見立て直すことも含めて、来年から始めて徐々に増やして2020年に向けていく。そ

して、2020年以降も築いてきたものを生かして、地域の中で展開していきたい。オリンピックイヤーに関しては、半年前、3カ月、2カ月、1月前、1週間前と、随時そのボリュームをふやしていき、開催期間中も文化プログラムおたがいさまを展開していくイメージです。

実施現場での「おたがいさま」の担い手のイメージとして、エリアマネジャー、コーディネーターの雇用と育成は、5つのエリアにエリアマネジャーが4人、コーディネーターが6人、プロジェクトスタッフとして10人、総数100人規模のクラブをまずはつくって進めていったらどうか。育成期間は2年間で、来年からトレーニング期間、実施期間と2020年に向けて展開していくイメージです。

プログラムとしては、2つ挙げています。ペナルティ・エリアとオフサイド。ワールドカップ真っ最中で世の中騒いでおりますけれども、ペナルティ・エリアとは、そこでシュートを打ったらすぐ入りそうな、危険な、一触即発のエリアのことですが、先進的な、先鋭的な文化を発信するプログラムとして位置付けます。オフサイドエリアは、障害者関連のプログラムとして位置づけています。サッカーでは、せめぎ合いのところで、オフサイドを上げたり下げたりすることで、より高度な戦術、ゲーム展開となりますが、いわゆる社会で言えばより高度な社会がオフサイドの意識によって生まれてくるのではないかと考えています。オフサイドのプログラムのアイデアは、障害・健常を問わず様々な人々が参画し、より豊かな価値観をベースにした新しいライフスタイルを構築するための表現活動の推進です。事例として音楽では、文化プログラム検討部会の大友委員を初め、ダンスでは池袋や六本木で発表されている近藤良平氏、美術では近年日本財団がアール・ブリュットの専門の美術館を全国につくっています。このネットワークを構築していければと思っています。全国で障害者の表現活動に取り組む施設・団体が約40件ありますので、東京での展開を中心に、全国でおたがいさま、文化プログラムをやることで新しい社会を築いていければと考えています。

オフサイド実施の5つの柱として、障害者・健常者の共同制作支援、教育の場の提供、国際交流プログラム、上演・発表支援、プラットフォームと事務局の形成を挙げています。詳しくはお手元の資料を見てください。

最後ですが、ワーキンググループ、チームなどを立ち上げて、実施、協議に向けて準備を早急に行っていければと思いますし、今日ここで色々な方々の意見を聞いて、すぐ実行に移せればと考えております。よろしく願いいたします。

○福原会長 ありがとうございます。1つ課題として、国のオリンピック委員会とどう関わるかがまだそれほど明らかにされていないんです。全国各地の美術館を含むネットワークについては、東京だけで考えることでは必ずしもないのではないかと考えていますし、今後そのシステムの構築もしなければいけないと考えています。

森評議員、お願いします。

○森評議員 今お二人から総合的な考え方についてのお話があって賛成ですが、実際にやっていくにはどういう具体的な案を出すかがかなり重要になっていくと思っております。今も地域的な発信、地域的な特性を生かしてそれぞれが発信していくことが大事というお話がありましたけれども、自分たちの地域の特徴をしっかり把握しないといけないなと思いました。近年5回ほどやってきた六本木アートナイトの提案を考えてきたんですけども、日比野評議員にも2年間活躍していただき、70万人、80万人が一晩で集まるイベントとなりました。それには、スマホやメディアの使い方が大変大事だと思います。六本木は都市の真ん中にあるということも1つの特性だと思いますし、大使館が72も集まっています、大使館の協力も得られます。そういう地域の特徴を生かしたイベントを発信する。また、海外の人たちをいかに集めるかも1つのポイントで、海外にプロモーションに出かけるなど、来ていただける努力をしております。

自分たちの地域がどんな特徴を持っているかをしっかり認識しながらプログラムを組むことがとても大事だということをお願いいたします。

○福原会長 ありがとうございます。野田評議員、お願いします。

○野田評議員 野田です。1964年東京オリンピックの時は、戦後が終わり、これから世界に入っていけるんだという壮大な物語があったと思いますが、今そういう物語を東京で見つけることは簡単ではない。そのためにはある程度の大きさの物語を積み重ねて、機運をつくって、それがいつの間にか大きい物語になるのが一番だと思っています。

そこで私が提案する1つの物語は、東京キャラバンという物語です。この物語は、2016年リオデジャネイロオリンピックの閉会式に始まります。キャラバンは数百台の車です。その車が文化を背負って4年間移動し、その先に東京オリンピックが2020年にあるということです。その背負っている車とは、サーカス团的なもの、お祭り、秋元評議員の言う文化祭でいいんだと思う。その中にはふだん街を歩いてもなかなか聞けない室内楽の音楽隊があってもいいし、アートギャラリー、映像を含めてもいい。移動劇場、移動映画館、食堂、カフェ、古本屋、簡易移動遊園地、大道芸人、猿回し、門付的な芸人、新種のストリートパフォーマンスなんかを載せたものがリオデジャネイロをスタートする。オリンピックがどういう規約があるかわからないんですが、その日に物語上で1台ずつ車が聖火を運んでいく。

実際に東京キャラバンの物語が展開するのは、最初のころは半年に1回か3カ月に1回位で、2020年に向けて隔週毎に東京から出発したというイメージで、東京に戻ってくるのは2020年です。各都道府県に週末に2カ所ぐらいを選んで、毎回違う場所に行く。

何を届けたいかという、わくわく感です。朝、街に何十台かの車があらわれて、そこで小さなお祭りをつくる。朝来てトンカントンカンやり出すと、その前から宣伝しているにしても、非常にその人間がわくわくすると思う。昼過ぎ頃から何か少しずつ始まり、その日で終わるのか、翌日までかはわからない形で。室内楽や参加型のアートギャラリーなど、どの程度のクオリティーのものを出すか、審議会みたいなものは絶対必要になって

くるが、余り敷居を高くしないほうがいい。海外からのアーティストも来れる人は来てもらってもいいんじゃないか。

キャラバンの良さは、他分野がクロスオーバーする形で全国に出向くので、そこに集まってくる人の数が違ってくる。そういうものが機運としてどんどん2020年に向かうということがすごく大事なんじゃないかなと思うんです。車も装飾化することがおもしろいと思うので、僕なんか昔のトラック野郎みたいなものしか浮かばないけれども、その原点にあるねぶた祭りのような構図にもできるだろうし、その移動している姿を見せるだけでも機運を盛り上げるのに十分な感じがします。

そして、東京キャラバンが各地方に行って、色々若いアーティストや伝統芸能と出会うことで1台増える。その地域の車が1台増えて東京に向かってくるという、偶発的な盛り上がりができるばさらにいいだろうし、全国各地から、2020年の開会式に向かっていく。向かっていった先にあるのは東京オリンピック開会式の場所で、お祭りの中心にあったのはそこであると。車は競技場の外を囲み、競技場に入れなかった人もそこに駆けつければ、開会式をのぞけなくてもお祭りを味わえる日になる。そして大事なのは、そこで終わらない。東京オリンピックは終わるけれども、そこで出会ったことによって、地方の人間や車に乗っていた若いアーティストの中からも新しい才能とかいいものが出てくるかもしれない。東京キャラバンで育ったということで、初めて1つの物語になればいいんじゃないかなという、私からの提案です。

○**福原会長** ありがとうございます。大野評議員、お願いします。

○**大野評議員** 大野です。私は指揮者として、今までにアトランタ、モントリオール、トリノ、ロンドン、バルセロナなどの都市で演奏会を開いて参りました。訪問先の人々にオリンピックについて伺うんですが、大別して2つの回答に分かれます。もうその話はしてくれるなという方々と、非常に愛着をもって語ってくださる方々です。その中でもバルセロナは非常に圧倒的な市民の支持と、近代オリンピックの中ではまれに見る成功例として認められており、ロンドンオリンピックがバルセロナを参考にしたというのはよく知られていることだと思います。

その根底にあるコンセプトは、市民の参加意識を高め、点から線へということに尽きると思うんですけれども、住んでいる人が愛着をもって語れるオリンピックにするということと、住民を置き去りにするような感覚を絶対に持たせない工夫が必要なんだと思います。

バルセロナでは、オリンピック前のことだけではなくて、オリンピック後の20年、30年を視野に入れたプロジェクトに取り組んでいたと思うんですけれども、いち工業都市であったバルセロナは、オリンピック前はヨーロッパの中で観光客数が15位ぐらいでしたが、今は第4位の都市に変貌しました。ロンドンは全く規模の違う街と言いながらも、バルセロナをモデルとして研究したと言われています。

開会式はラ・フラ・デルス・バウスという芸術家集団が行いました。1992年の段階では、ラ・フラ・デルス・バウスは20代半ばの非常に前衛的な考え方を持った集団でし

たが、92年を機に一躍世界的な名声を獲得し、彼らの活動が世界的な広がりを見せて、今ではアカデミックで多少保守的と言われているオペラの世界も席捲しています。オペラの世界に非常に斬新な、視覚的な要素を持ち込んでいるのですが、バルセロナが20代の若者を発掘した努力の賜物だと思います。そういう観点からも、20年、30年後を担う人たちは、オリンピックの時点では若い世代であるべきだということも一つ考えのもとになるのではないかと思います。

深澤委員の御提案にスマホのアプリのことが書いてありましたが、これもバルセロナの大変な特徴でありまして、「スマートシティ」という名のもとに、インターネットのアクセスポイントの充実、無料でどこでもインターネットにアクセスできる。昨日大阪から帰ってきたのですが、新幹線の中ではアクセスできないんです。バルセロナでは、空港や駅のホームだけではなく、ありとあらゆる街角でインターネットにアクセスできる。昔のローマの建物、ガウディ、ジャン・ヌベールの新しい建物まで含めて、バルセロナは建物の博物館と言われていますが、専門知識のある建築家の詳しくやさしいガイドも何カ国語が入っている。市民や観光客がそれを参考にしながら街を回れる結果、観光客の大幅増につながっている。東京もそうした点の充実に向けて努力をすべきかと思います。

次に、具体的な点といたしまして、3点申し上げたいと思います。

バルセロナには、バルセロナ交響楽団というオーケストラがあります。私は来年の9月からその音楽監督になるのですが、1992年オリンピックの際に、バルセロナ交響楽団が文化発信の担い手として世界を回り、日本にも来ています。オーケストラだけではありません。日本の場合ですと、それが歌舞伎や相撲、あるいは文楽ということになると思いますが、こういう努力をして、バルセロナという街のそして東京の現実というものを知らしめる努力を重ねていったということです。

来年4月、私は東京都交響楽団という都が運営しているオーケストラの指揮者に就任することになりまして、来年11月にヨーロッパツアーをいたします。そのプログラムの一つに、日本を代表する作曲家の細川俊夫さんが作曲した、福島の津波で子供が流されてしまった母親の哀歌が入っています。92年のバルセロナの時は日本にツアーが来ましたが、今度は、日本のオーケストラがヨーロッパに行くということで、日本の文化の意義を問う機会にさせていただきたい。

東京都交響楽団は来年50周年を迎えますが、50年前の1964年東京オリンピックの時に、東京発の新しい文化インスティテューション（機関）をつくろうということでできたのが、1965年に発足した東京都交響楽団です。東京都交響楽団はオリンピックからオリンピックへ結ばれるという使命のもとに、活動を続けて参りたいと思います。

その際に、ポスターなどに東京都が文化発信として認証しているという意味でロゴをつける。そのロゴを見ることで、国内だけではなく海外にもこれが東京都の発信であるということが一目瞭然でわかる。こういうロゴは作れないでしょうか。いろいろな催しについて共通して持てる試みを、ぜひ皆さんで御討議願いたいと思っております。

第2点、野田さんのお話にも出ましたけれども、日本の文化の国際水準の高さをいかにして広めていくかということに関して、1920年代に藤田嗣治がパリで活躍していましたが、彼が戦時中日本に帰ってきた際に、「白鳥の湖」の舞台装置をつくったんですが、時代の流れで演奏されず、その装置も日の目を見ないままお蔵入りしています。藤田嗣治の没後50周年となる2018年に、ぜひ日本の知力を結集して、それをバレエとして実現したい。その際には、今、メトロポリタン歌劇場がライブを大スクリーンで上演していますが、上野、六本木、渋谷、池袋に何十メートルの大画面をつくって同時中継することで皆さんとの交流、あるいは参加意識を高める。

あと私が考えますのは、東京23区、島しょ地域、市などに依頼をして、コミュニティオペラを実現できたらなということです。日本のように短歌や俳句に、あれだけ市民が参加して新聞に掲載されるような国はほかにはありません。短歌や和歌でストーリーをつくり、そのストーリーに作曲家が曲をつけて、野田さんに演出していただく。オペラは何となく近寄りたいたいといいますと、新しい形の舞台音楽、そういうものを総合芸術として、皆さんが参加することで実現可能なコミュニティオペラというか、市民音楽劇という方向性も担っていききたいなというふうに夢見ているわけであります。

被災地と一緒に作り上げるということで、福島には福島ジュニアオーケストラや郡山ジュニアオーケストラなど子供のオーケストラや、少年合唱団や吹奏楽団など、子供たちで組織されている音楽団体がたくさんありますので、児童たちの音楽フェスティバルで海外の一流のアーティストに演奏、指導、あるいは歌に参加してもらい、宮城スタジアムが東京オリンピックの競技場の一つとして含まれているということです。福島の文化もそこから発信しようではないかというような考えにも至るわけであります。

最後に、今、パリで高田賢三さんの立案で始まっている起き上がりこぼしのプロジェクトがあります。起き上がりこぼしは福島に400年前からある民芸品で、もとは白い形をしたものです。転がっても絶対起き上がるということですけれども、4人家族だったら、必ず5つ家の中にあるんだそうです。何を意味するかというと、苦しみを乗り越える、家内安全、福を呼ぶということです。

パリから世界を回って展覧会をして、最終的に福島に着くというプロジェクトを高田賢三さんの発案でやっています。私の考えでは、何十メートルもの起き上がりこぼしをつくって、オリンピックに参加している二百何十カ国の首相に描いていただく。そして、それを展覧会後に福島、最終的には東京の新国立劇場に持ってくる。これは起き上がりこぼしでなくてもいいのかもしれませんが、そういう考えです。市民と世界の人々を視野に入れて、巻き込んで、一大潮流をつくっていくということが、このイベントの使命だと思っております。ありがとうございました。

○福原会長 ありがとうございました。小山評議員、お願いいたします。

○小山評議員 オリンピックが人々の心を束ねるベルトとしてこんなに頑丈なものはないと思いますので、先ほど野田評議員がおっしゃったみたいに、機運をつくるということ

が一番のポイントかと思います。そして、視点として、例えば2050年に振り返ったときに、思えば、東京オリンピックがああ分岐点だったよねというような結果が残せていたらいいのではないかと思います。

僕は2つあるんですが、一つは、東京オリンピックが、思えば日本の教育の分岐点だったねと言わせるようなことができないかなと思います。今ほど、近い未来のことをみんなが一生懸命考えている時期というのはなかなかないのではないかな。具体的な2020年というゴールを頭に描きながら、どうすればそのときに素敵な時間をつくれるだろうかということを考える。つまり、子供たちに未来という授業をつくってあげることができないかなと思いました。歴史は今までみんな一生懸命勉強して、その歴史の上で争いが生まれたりしますけれども、未来という授業はそういえばないかなと思いましたので、例えば東京都で未来という授業をつくり、2020年のことをみんな考えてみる、そういう授業をつくれないうか。それがきっかけとなり、日本の教育制度の見直しが始まったというような一つの機運をつくれたらいいかなと思います。

もう一つは、人を喜ばせることの幸せを実感する最高のチャンスではないかなと思います。最近、僕、50になりまして、四国巡礼・お遍路の旅に明日から1カ月出ようか迷っているんですけども、お遍路さんのことを勉強すればするほど、なんて素晴らしいシステムなんだろうと。空海が本当につくったかはわからないですけども、文化・芸術版のお遍路のシステムが東京にあったら、海外から人がやってくる、巡っているうちに何かを悟る、そして東京都の人たち一人一人がその人たちを迎えて、何か施しをすることによって、人を喜ばせる、人を輝かせるということの幸せを実感する。そういう社会のシステムがこのオリンピックをきっかけにできるのではないかなと思いました。以上でございます。

○福原会長 ありがとうございます。浅葉評議員、お願いいたします。

○浅葉評議員 浅葉克己です。1964年に傑作のポスターができて、これが世界中に発信されて、グラフィックデザイン、アートディレクション、タイポグラフィが確立されました。僕たちは20代だったのでこの影響がすごく強く、広告というものに走って行きました。64年、72年、長野の98年と、日本グラフィックデザイナー協会がやっていますが、この影響を受けて広告に強いものをつくって行きたい。

世界中でデザインに注目が集まっています、今年3月に深圳で浅葉のポスター展、ミラノでは、「TOKYO IMAGINE」という展覧会をやりました。「TOKYO IMAGINE」では、大風呂敷展や若沖のインスパイア展、映像、インダストリアルデザイン、あらゆるものを発表して、10万人ぐらい入りました。

98年には長野オリンピックで初めて環境という問題が出てきた。2002年FIFAワールドカップでは招致委員会に入りましたが、日韓共同開催になったので、デザインしたポスターは招致委員会で消えてしまいました。

私は卓球が死ぬほど好きでありまして、世界卓球選手権のポスターとか、ひとりピンポン外交というのをずっと続けていまして、死海で卓球台を浮かべてイスラエルのチャンピ

オン、ヤコブと試合をして史上最低の世界チャンピオンに輝きました。八丈島で今年は30回目の大会をやりましたが、小さい子供たちが真剣にやるようになりました。青島は人口が200人しかいないんですが、ここでも卓球大会をやりました。絶海の孤島と卓球というのは一体何だろうという感じもしますけれども。

そして、東京・2020年、「日本は、ちゃんと、美しいか?」。やはり一つの言葉とビジョンは欲しいなという感じがいたします。今年8月に、AGIという国際デザイン会議がブラジルで開かれます。サッカーも終わり、オリンピックはまだですけども、オリンピックの調査をしてきたいと考えています。日本グラフィックデザイナー協会は会員が3,000人おまして、昨日立派な年鑑もできました。後ろに今までのオリンピックのシンボルマーク、ポスターが全部出ています。これを置いていきますので、参考にしてください。ありがとうございました。

○**福原会長** ありがとうございました。野村評議員、お願いいたします。

○**野村評議員** この評議員に就任以来、東京は文化・芸術の集積地であり、かつ発信地であり、今後の東京都の文化政策はこのことを認識しつつ、多様な事業が行われるべきであると申し上げて参りました。オリンピック・パラリンピックの開催を起爆剤として、文化の集積地、発信地としての仕組みを充実させ、飛躍をする契機とすべきではないかと存じております。すなわち、文化プログラムの企画、その実施をする姿勢にしても、一過性に終わることのない、むしろ都の文化事業、文化施策としてオリンピック以降も継続できる基盤整備に取り組むべきであると思います。

日本の伝統芸能の歴史を振り返ってみますと、野外で行われてきた流れがだんだん屋内へと位置づけられ、繊細な密度ある技法へその性質が変化して参りました。今日、改めて屋内・屋外の視点からそれぞれの芸能の特性を分別して実施するということを検討すべきではないかと思えます。

評議員に就任以来、和の空間の創設について都の文化施策として取り組んでいただきたいと、たびたび御提案申し上げて参りました。日本文化の精神にたくまず、触れることのできる空間、肌で感じることのできる空間、文化発信の仕掛けとしての拠点が何としても必要でございます。劇場という屋内空間の発想だけではなく、また、伝統芸能にとどまらない衣食住をも含む日本文化の総合的、複合的な日本そのものというスケールを有した空間であります。

東京オリンピックに際して、各種の施設が建設されるということではありますが、ぜひ和の空間づくりを準備段階で位置づけていただき、その一部を本格的な和の様式で建設をする、あるいは仮設建築で対応することも一案でありましょう。以上でございます。

○**福原会長** ありがとうございました。花柳評議員、お願いします。

○**花柳評議員** 大変古い話で申し訳ないんですけども、前回の東京オリンピック当時、私は舞踊と同時に長谷川一夫さんが主催する東宝歌舞伎という演劇の一座または劇団に入っていました。長谷川さんは非常に先取りの名人で、東京オリンピックの前年に、これか

らは外国人の観光客も増えるだろうし、今で言うサポーターも来るだろうから、そういう方たちのために日本の文化をお見せしたい。歌舞伎とも宝塚とも違う、その中間で、オーケストラの演奏で日本舞踊を見せるショーをオリンピックの前年にやりました。非常にこれがお客様に受けて、外国人も日本人もたくさん入り、通算3カ月にわたってロングランをしました。東京オリンピックにかけて非常にこういうことがはやり、たくさんナイトクラブがある赤坂で和のショーをやりました。開催された年も同様に、この成功に熱して歌舞伎でも本公演の後に夜10時から、東宝劇場では夜10時から10時半でしたが、東宝歌舞伎や新橋演舞場などでも日本舞踊をはじめとする古典芸能が、ナイトショーとかナイト歌舞伎の深夜公演を行ったわけです。その当時、開催中は地下鉄もバスも終夜運転をされていて、大変お客さんが入ったわけです。これが約50年前にやったことです。この時に振りつけをさせていただいたんですが、長谷川さんの頭の良さにはびっくりしました。

これとは別に、一昨年从上野の東京文化会館で「日本舞踊とオーケストラ」という公演を始めまして、昨年東京都の主催で、私と板東玉三郎さんの2人で、ドビュッシーの「プレリュード」と「オンディーヌ」をテーマにした踊りをやりまして、大成功いたしました。今年は更にスケールを大きくして、日本舞踊、オーケストラ、クラシックバレエ、宝塚が合同で、美術には横尾忠則氏、森英恵氏など、いろんなジャンルの方が加わって1つの新しい舞台芸術をつくり上げることになりました。これを東京オリンピックまでずっと続けて毎年できればいいなと思っております。1回目の「ボレロ」では野村萬斎さんに出させていただいて、今年はクラシックバレエのトップダンサーの吉田都さんが出る予定です。毎年「ボレロ」は色々なバージョンでやっていこうということで、できればスケールを大きくして、東京オリンピックのときにはまた新しい舞台空間をつくれればいいなと思っております。よろしく願いいたします。

○福原会長 ありがとうございます。太下評議員、お願いします。

○太下評議員 文化プログラム検討部会のときに、文化に携わることを職業にする契機になるようなオリンピックを御提案しました。1964年の大会では、浅葉評議員からも御紹介があったとおり、デザイン、デザイナーが社会的に重要な職業と認知されたわけです。それと同じことがこのオリンピックでもできるかと思えます。二、三年ほどの前の「ニューヨーク・タイムズ」のコラムで、現在、小学校に通っている子供たちの65%は、恐らく今ない職業に就くだろうという話がかかれていて、結構日本でも話題になりました。今ない職業を特にこの文化の分野で作っていくことが、このオリンピックには求められると思えます。

その上で御提案したいのは、今日お集まりの委員の皆さんからのいろんな御提言を進めていく必要がありますが、同時に、東京、そして日本の文化のレガシーをきちんと守っていくということが非常に大事な部分になってきます。冒頭、舛添知事の御発言の中にも「文化の戦い」という表現がありましたが、実は今この文化、特にコンテンツをめぐる覇権が非常に大きな世界の争いになっています。

具体的に言いますと、アメリカの「グーグル」が文化の世界で非常に大きな存在感を増している。これに対抗する形でフランスを中心としたEUでは、EU中のミュージアムで連合体を形成して「ユーロピアーナ」という巨大なバーチャルのアーカイブを、非常に大きな予算を投じてつくっています。これに対して特にまだ日本は動きはないんですが、デジタル関連のコンテンツに関しては議連もできており、ナショナル・アーカイブ・ミュージアムをつくろうかという動きも出ています。ぜひ東京都としては、この新しいアーカイブ、新しい形のミュージアムを東京に誘致することが必要なのではないかと考えています。

その際に、著作権特区のようなことができないかなと考えていまして、オーファン・ワークス・ミュージアムを提案しております。オーファン・ワークスは孤児作品と訳されますが、要は物としておもしろい、例えば小説、マンガ、映画はわかるけれども、その著者がわからない。著者名はわかってても所在、生死の存在がわからない。よって、使用の許諾がとれない。許諾がとれないので誰も何も使えないという状況が出ております。国立国会図書館が今、近代の図書をデジタル化しようと、著者の所在を確認していますが、明治期の刊行図書で既に7割以上の著者が確認をとれないという状況が起きています。これは本当に今手を打たないと、時間がたてばたつほど著者の確認は加速度的に取れなくなってきました。そこを逆手にとって、ミュージアムでオーファン・ワークスと思われるものを展示する。ミュージアムが広く知らせる、公知するという機能を使って、展覧会期間中に著者または著作権者という名乗りがなければ、オーファン・ワークスと認定して、小説であれば舞台化や映画化を許諾していくような体制を作ればいいのではないかと。そういった試みがまだ世界ではありませんので、現在はユーロピアーナやグーグルの動きに対して日本は遅れているわけですが、こういった展開をすれば、一気に著作権行政、新しいコンテンツ政策の最先端に出ることができるんじゃないかなと思っています。

もう1点は軟らかい提案で、ロンドンオリンピックの時は26種類の競技が行われましたが、この競技の一つ一つに日本が誇る漫画アニメのキャラクターを当てはめたらどうか。これは東京都ではなくて、民間の動きでもいいと思いますが、東京都なり政府が音頭とりをしていけばいいのではないかと考えています。

こういった形でやると、民間からのスポンサーシップも出てくると思います。オリンピックのスポンサーシップ制度はかなり厳格ですが、もし可能であれば、それとコラボもできればいいと思いますし、難しいようであれば、オリンピックではなく勝手にスポーツを応援しているんだというスタイルをとればいいと思います。スポンサーで集めたお金は当然文化のためにも使えるファンドになると思っています。さらに言えば、それぞれのキャラクターを主人公にした日本語教材をオリンピックに参加する200ぐらいの国、言語数で言うと数十になるとは思いますけれども、各国語バージョンをつくってウェブで無料配信していく。こういった形で日本のファンを増やしていくことが、このオリンピックに絡めてぜひ文化的な動きとも連動する形で必要なのではないかと考えています。限られた時間なので、2つほど提案をさせていただきました。

○福原会長 ありがとうございます。仲道評議員、お願いします。

○仲道評議員 皆様のお話を伺っておりまして、2つ大きく思ったことがございます。1つは、このオリンピックを文化の祭典にすること。文化を使ってどのような社会をつくっていくかという視点にまで踏み込んだ構築が必要になるということです。

もう1つは、東京と地方の関係ですけれども、東京には地方に対する責任があると思っております。東京に住むアーティストやプロダクションが地方に出て様々なことをして潤って帰ってきて、それが東京に還元されているという構図があることにおいて、東京都は地方も視野に入れた考え方をしなければならないのではないかと思います。

次にこのオリンピックの目的ですけれども、新しい文化施策のモデルをつくり、東京に定着させながら全国に広め、相互に理解し合える住みよい成熟した街、東京を国内外にしっかりとアピールする……という観点に基づき、今、世の中に必要とされていることが、どのジャンルにおきましても、「つながり」ということだと思っております。

「つながり」をつくるために、音楽はとても使える。音楽が人と人とを結びつけることができるということは、皆様もちろんよく御存じで、言葉が要らないジャンルです。なおかつ、音楽は、多様なジャンルと結びつくことができます。音楽というと、聴いて感動したり、自分が演奏することが素晴らしいと思われませんが、「鑑賞」と「実践」をつなぐ「ワーク」が入ることで、「体験と対話を伴うプログラム」ができるのです。これにより、コミュニケーション能力を高め、なおかつ創造性を育み、想像力を高め、音楽をよく、深く理解するプログラムをつくることができます。

オリンピックが一過性のイベントにならないために大事なことは、「体験と対話を伴う次につながる複合的なプログラム」ができるか否かということだと思いますが、そこに音楽が大きな力を持ちます。鑑賞したり、感動するだけではなくて、様々なつながりを生み、魅せることができる新しい形を作ることができる。そのための音楽プログラムとして、これから色々な研究が行われることが大事だと思うんです。

つなぐということの細かなアイデアとしては、まず内外をつなぐ。インターネットを使うとか、英語表記の徹底です。例えば大阪では、ナレッジキャピタルやグランフロントという建物がありましたが、ナレッジキャピタルがKNOWLEDGEのCAPITAL、グランフロントがGRAND FRONTに結びつくのでしょうか。そういう細やかな対応は必要ではないか。また東京都が都内の小学校で各国を調べるプログラムを導入したということを見聞しました。これからは調べて理解するだけではなくて、その国の人たちと一緒に体験したり、語り合う複合的なプログラムになっていくべきではないか。

次に人と人とをつなぐ。都内に各文化をテーマとするエリアをつくって、まちの自慢を語る語り部のシステムをつくる。また、英語教育も必要です。

そして、シニア音楽オリンピック。今、60歳以上で音楽を楽しんでいる方が世の中にたくさんいますが、発表の場がない。そういった方々による音楽の祭典、コンクール、オリンピック的なものはどうか。都内の小さな場所で365日、そこに行ったら何か音楽を

やっているという企画を音大生や若い人たちに立てさせて次代へとつなげていく。こういうプログラムも、おもしろいんじゃないかなと思いました。

東京と地方をつなぐということでは、地方が置き去りにならないように、東京で何が起きているのか、何を狙っているのかを発信することは必須です。そして、そのときに、地方の面白いものを東京で展開していくことが必要なのではないかと思います。地方の祭り——地域創造でも伝統芸能フェスティバルを年に1回しておりますけれども——それとコラボする。聖火リレーとともに地方から東京へ子供たちの未来への手紙、歌、子守歌などをつないで東京に持ってくるのもおもしろいのではないかと思います。

芸術と教育をつなぐ意味では、学校教育の中に音楽的な文化創造的プログラムを導入するためのモデル校を東京都で設定し、東京都独自のプログラムを策定するのはどうか。音楽の可能性を広げるために、なされるべきことだと思います。また、芸術と福祉をつなぐ上でも同じことが言えると思います。

このためには、東京のアーツカウンシル機能の強化と、別枠で企画を行うためのプラットフォームづくり、専門的な人材の投入など、人づくりと人をつなぐ環境整備が急務だと思います。トウキョウ・アート・リサーチ・ラボは、とてもすばらしい取り組みです。その音楽版をつくることも有意義だと思います。音楽による対話、思考、気づき、感動にかかわる人材を拡充する。

それと、オリンピックに向けて、アートを英語で語る人を増やす教育機会づくり。説明して一緒に語ることができないと、なかなか伝わりませんので、それも必要だと思います。

そして、アートにかかわる人へのハローワーク的な機関が必要だと思うのですが、芸術系の企画をする人、携わる人はボランティアではなく、何らかの雇用的な形で行っていくことができるシステムをつくっていただきたい。オリンピックでみんながボランティアとなると、その後に若い人たちがアートの現場で働いていく基盤ができなくなるので、ボランティアという考え方のどこで線を引くかということを、精査していただきたいと思います。

そして、学校教育と芸術の可能性を広げる研究チームをつくっていただきたい。既存の団体へ依頼したり協力して行うという形だと、なかなか進まない可能性があるという危惧を持っております。オリンピックを契機に東京都が新たなリーダーシップを発揮して、既存の団体の幾つかを結びつけるとか、新たな枠組みをつくり、オリンピックは文化施策の通過地点と考えた政策を目指していただけたらと思います。以上です。

○福原会長 吉本評議員、最後をお願いします。

○吉本評議員 文化プログラムをなぜやるのかということ、最初に明確にすべきではないかと思い、ビジョンを考えました。この文化プログラムを通じて、文化の国「日本」を再発見し、その価値観を含めて国際的にアピールするというものです。御承知のように、日本には多様な文化が渾然一体となって存在しています。そうした文化を活用した地域活力の創出を全国展開する。あるいは、世界の芸術文化の振興に東京や日本が寄与する。そ

して、文化やスポーツに支えられた高齢社会、成熟社会のモデルを世界に提示するという
ことを行ってはどうかと思います。

そのために3つ案を考えました。1つ目は、アートサイト日本2020です。これは、
全国各地の文化的リソース2,020件、各都道府県で約40件を選出して日本の文化の
多様性やポテンシャルを世界にアピールする。これは東京五輪を東京だけのイベントに終
わらせないため、文化観光や地域の活力創出につなげるためのものです。具体的には、ウ
ェブサイトを立ち上げるというアイデアですが、イギリスのトラベルガイドRough
Guide社の日本の必見スポットでは、6番目に直島が登場するなど、上位のほとんど
は日本の文化に関するものになっています。ですので、4年間のカルチュラル・オリンピ
アードを活用して専用サイトを立ち上げる。日本文化ミシュランのようなイメージですが、
ブリヂストンがオリンピックのスポンサーになりましたので、ぜひスポンサーいただいて、
立ち上げてはどうか。サイトは全ての五輪参加国の多言語対応にしていくというアイデア
です。

2つ目は、クリエイティブ・フロント東京／日本というアイデアです。東京や日本から
芸術の未来を創る。そのために、国内外のアーティストにプロポーザルと新作委嘱を大々
的に実施して、アーティストの夢の実現できる都市「東京」、世界の芸術を牽引する国
「日本」を実現させようというものです。森記念財団の発表している世界の都市総合カラ
ンキングでは、東京は4位ですが、文化・交流が非常に弱い。2012年のロンドン五輪
でも、204カ国から4万人以上のアーティストが参加して、新作委嘱5,000作品以
上が行われました。東京や日本を世界のアーティストにとってチャンスのある場所にして
いくというアイデアです。

3つ目は、日本人は皆アーティストだ！という宣言をして展開するプロジェクトです。
そのことで、老いても文化とスポーツで豊かで元気な国日本、成熟社会の新たなモデルを
世界に提示するということです。実は、2012年に世界都市文化会議という国際会議が
ロンドン五輪の文化プログラムの一環として行われました。その時に世界の都市が注目し
た東京の特性はスライドでご覧のような項目で、中でも東京には一般家庭に83万台のピ
アノがある。この数字は世界の各都市とも信じられないという反応でした。日本人は、皆
が芸術の鑑賞者であり、芸術の創造者である。それを世界にアピールしようというプロジ
ェクトです。

そのために3つのアイデアを考えました。ひとつ目は東京に83万台ということは、日
本国中に1,000万台ぐらいピアノがあるだろう。開会式の時に、それを全部同時に鳴
り響かせるというプロジェクトです。

2つ目は、250万人の歓喜の歌。2020年はベートーベン生誕250年ですが、日
本ほど第九が愛され、演奏されている国はないと思いますので、閉会式のときに250万
人で同時に歌おうというものです。

3つ目は部会でも話の出た盆踊りです。盆踊りはオリンピックとパラリンピックのイン

ターバルの時期なので、その時に全国で盆踊りを展開してはどうか。高齢者、障害者が全て参加し、日本版のUNLIMITED、障害者だけではない高齢者も含めたプログラムを展開するというアイデアです。

そしてさまざま御提案いただいたものを実現するためには、いろいろな課題があると思います。いずれ組織委員会が全てを掌握する形になると思いますが、東京都や文化庁、あるいは全国の都道府県とどのように連携していくのか、財源をどうするのか。ロンドン大会の予算は220億円でしたが、当初、組織委員会から示された文化予算はわずか20億円弱だったそうです。彼らはそれを拡大していく努力を行いました。

あわせて、東京都の文化政策をどう強化するかということも考えなくてはならない。2020年を通過点として、文化のレガシーを構築する必要がある。これまで実施してきた東京文化発信プロジェクトをさらに継続、強化する。場合によっては再整理も必要かもしれません。東京都の文化施設は2020年までに大規模改修が終わります。2020年五輪に向けて事業、そこには当然組織や財源が伴うが、それをどうやって強化・継続するかも大きな課題です。

最後に組織についてです。アーツカウンシル東京は、東京都歴史文化財団の中にできたが、財団から独立させて強化してはどうか。そのことによって、東京都はこの評議会が文化政策の方針を定め、東京都歴史文化財団は文化施設の運営、アーツカウンシル東京は助成を中心とした文化専門機関という形ができ上がります。参考に示した数字は、ニューヨークとの比較ですが、アーツカウンシル東京の現在の助成予算は1億5,000万円ですが、ニューヨーク州のアーツカウンシルは36億です。東京という都市の規模を考えると、アーツカウンシル東京の強化は急務ではないかと思います。以上です。ありがとうございました。

○福原会長 最後に舛添知事のお話を伺う前に、私の提案を3つほど申し上げておきたいと思います。1つは、ヘルマン・ファン＝ロンパイ欧州理事会議長は、大変な俳句の支持者であり、世界中で俳句がつくられています。フランスの中学校の話を聞きましたが、定型俳句と定型でない俳句と、それぞれ学校によって違うようですが、俳句が中学校レベルで普通になっています。世界中の俳句の人たちを集めて、開会式にファン＝ロンパイ欧州理事会議長が来るでしょうから、名誉会長になっていただくこともあるのではないかと。

2番目に、日本ではロボット演劇が始まっていて、これはまだ世界で他にない。ロボットは日本の誇る先進技術の一つでありますので、演劇を取り上げるのではなくて、演劇を添え物にしてロボットの何かの競技みたいなものがあった方がいいのではないかと。

先ほど東京だけでピアノが83万台とありましたが、ピアノはもちろん世界中で弾かれているわけですし、どういう切り口かわからないけれども、ピアノ愛好者を集めた何かがあった方がいいのではないかと思います。

最後に、人材をどう確保するかが問題だと思います。今輝いている人は、2020年になるとどうかを考え、今から発掘、あるいは、育成しておかなければならない。ロンドン

では、立役者になった女性が少なくとも5人はいます。5人とも全員女性で、2人は公募で集めた方です。それぞれの領域で活躍したようですが、日本でも、女性でなくても、若い人、まだ未発掘の人がいる。その問題に取り組む必要もあるのではないかと考えております。

これが本当の最後ですけれども、舛添知事の発言の中で、世界のフードフェアを開くことはどうかと言っておられますし、アール・ブリュットについては前から色々な機会に御発言なさっています。アール・ブリュットの話色々聞いてみますと、日比野評議員のおっしゃったような健常者との境がない世界もあるし、本当にディスエイブルな方々を含めたアール・ブリュットもある。パラリンピックの出場者はかなり厳しい制限があるようですが、パラリンピック並みにやるか、もっと幅を広げてアール・ブリュットみたいなものやっていくか。これも検討する必要があるのではないかと考えております。

最後に、舛添知事、お願いいたします。

○舛添知事 まとめの挨拶のときにお話ししますので、言い足りなかった方がおられれば、どうぞおっしゃってください。あと5分ぐらいありますので。

○福原会長 どうしてもという方はいらっしゃいますか。

○大野評議員 皆さんが言われたことをいつ、どの時点で実現するかということですね、アーツカウンシルのことも含めて。ロンドンオリンピックの例で言いますと、ロイヤル・オペラ・ハウス最高経営責任者のトニー・ホール氏がオリンピック組織委員会カルチュラル・オリンピアド・ボードの会長に就任した6年前にもう始まっていた。東京はもう5年ちょっとですから、いつ、今の意見が何かしらの形で具体化するかということだと思います。

○福原会長 他にございますか。ないようですので、知事のお話を伺いたいと思います。

○舛添知事 私の感想を含めてまとめを申し上げます。素晴らしい提案をいつどういう形で実現するかというのが一番問題になるので、これは、生活文化局で、今日の提案をどうすれば実現できるかを早急に検討して下さい。

太下評議員の著作権特区の話でオーファン・ワークスが出ましたが、これは国の許可を取らないでもやれるような話だと思いますけれども、これをどうするかということも考えないといけないと思います。

吉本評議員がピアノの例を出されましたけれども、ソチの閉会式のときに、ものすごい数のピアノが並んで、すごいなと思いました。ロシアの文化を紹介する場面で、チャイコフスキーから現代音楽まで含めて、ピアノが何十台も並んで演奏したというのがあるので、そういうことも一つかなと思っております。

野田評議員がおっしゃったキャラバンを、リオから乗るといのは壮大なアイデアなので、何かできるかどうか。私自身が五輪の旗を引き継ぎにリオに行き、リオの閉会式で東京のプレゼンテーションをやらないといけません。時間がないので、今日おっしゃったようなことをそのプレゼンテーションの中でどうやるか、オリンピック・パラリンピック準備局と生活文化局で共に考えてもらわないといけないと思います。

大野評議員がバルセロナの例でたくさんおっしゃられたように、ぜひ東京都交響楽団がそういう役割を果たせればと思います。

それから、東京の文化プログラムのロゴを浅葉評議員、いかがでしょうか。御検討いただければと思います。藤田嗣治の「白鳥の湖」をどうするかということも含めてやる必要があると思います。また、日本はちゃんと美しいかというのは、そういうような形で文化の発信を1つでまとめるかどうか、これもまた、皆さんの御意見を賜りたいと思います。

野村評議員や花柳評議員から、和の演出と言われて、私が子供に歌舞伎を鑑賞させるときに、歌舞伎の音楽は本当に伝統的な音楽でしかできなかったのかということがあり、「あまちゃんのテーマ」をやったらどうだというんでやったらぴったりと合った。伝統楽器であいうことができる。ボレロの話が出ましたけれども、ぜひ和洋の混在ができればと思います。花柳評議員の話で、終夜運転していたということがあったのですが、森評議員もおっしゃったこともありますけれども、森美術館は夜も開けておられるんですが、昼間スポーツを見た後、美術館やピアノのコンサートに行くというような形で、少し美術館の開館時間を長くする。みんな6時半に始まるため、若い人も含めて仕事がある人が行けない問題の原因は交通機関です。若い人が八王子や多摩の奥に住んでいると帰れないから、9時頃に終わってしまう。この交通体系も、実は文化に非常に関係があると思っており、一生懸命やっています。

仲道評議員からも、音楽の力をどうやるか。福祉等の関係もたくさんあります。

そのほかの皆さん方からも大変素晴らしい御提案をいただいたので、もう今から始めないと間に合わないので、都知事として都の組織の中でどういう形でできるか、実行部隊を考えたいと思います。皆様方をお願いしたいのは、スタートはしますが、リオの時に東京のプレゼンテーションをやらないといけない。ソチの時に韓国の平昌が、韓国文化が一気にわかるような素晴らしいことをやった。ぜひリオで、東京の素晴らしいプレゼンテーションをやるのが、野田評議員のおっしゃるようなキャラバンの構想にもつながると思います。まだまだ、色々お話ししたいこともたくさんありますが、今日は大変素晴らしい御提案をいただきましたので、評議員の皆さん方の間でもっと議論を深めていただきたい。また、今日のことで検討委員会もございますので、みんなでオールジャパンでやる必要があると思っています。あくまでも2020年は通過点で、そこから先、さらに大きな展望が開けるようにやっていきたい。行政の仕事というのは、アイデアに口を出すのではなく、出されたアイデアを実行する時に現実的な力になると、そこに尽きると思いますので、私たちはそういうことをやりたいと思います。ぜひ頭脳の部分で、今後ともひとつよろしく願いいたします。本当に今日はありがとうございました。

○福原会長 ありがとうございました。1つ付け加えますと、文化プログラムは、日本の文化を世界に発信するということと、オリンピックに来られた方に日本の文化をお見せするという、日本人が再確認するというのもあるのではないかと思います。

もう1つは、スポーツと同じで文化でも参加していただくということが必要で、ロンド

ンオリンピックの象徴的な目玉は、シェイクスピア演劇を世界37カ国から、原語で上演するということでした。たしか2年ぐらいかけたんですが、ロンドンにいる、例えばイランでしたらイランの人々がそれに熱狂するという仕組みをつくっているんです。スポーツに参加することも大事ですが、文化で参加する仕組みもつくりたいと思っています。

本当に今日はいろいろな視野から、大変建設的であって、また具体的なアイデアをいただきましたので、とても消化し切れないようなところがありますが、できるだけ皆さんのお考えを少しずつ入れながら、目立った成果のあるものにしていきたいと考えていますし、オリンピックが最終着地時点ではない、このオリンピックによって日本を変えて、これ以後の日本の文化の発展にも寄与するんだという考え方をしなければいけないと思っていますので、どうぞ、皆様これからも御支援をお願いしたいと思っています。

お忙しい中、皆さんに御出席をいただき、お知恵をいただきましてありがとうございました。これから先も、今度は20回になりますが、よろしく願いいたします。

以上